

常勝將軍パンチョ・ピヤ

1913年9月26日、ドゥランゴとチワワの主だったリーダーがヒメネスの町で会合し、ピヤが全軍の指揮を取り、最も重要な都市トレオンを攻略することで合意した。トレオンは鉄道のハブであり、物資や資金調達ができ、同時に点在する連邦軍への補給路を遮断することが出来た。七月、カランサが攻略に失敗しているだけに、成功すればピヤの威信は大いに高められることになる。しかし危険も大きかった。ピヤは未だ六千から七千の大軍を指揮したことがなかった。ピヤは強力な守備隊で固められた大都市を攻略するために必要な装備を持たなかった。彼の軍はサン・アンドレスで分捕った二門の砲しかなく、使いこなせる砲兵もいなかった。しかもトレオンのあるラグーナ地区で集められた兵士は全く訓練されていなかった。³¹

チワワ連邦軍の指揮官サルバドル・メルカドはピヤの北部師団正規部隊を殲滅するために挟撃作戦に出て、ジェネラル・フランシスコ・カストロが率いる一大隊をトレオンに送った。メルカドは七月のときのように、敗れたピヤ軍が逃れて北上してくると考えていた。トレオンの連邦軍指揮官ジェネラル・エウティキオ・ムンギアは革命軍の戦闘能力を過小評価し、彼のジェネラルの一人、フェリペ・アルバレスに五百の兵をつけて、はるかに多勢の革命軍分遣隊を攻撃すべくトレオン郊外の町に発進させた。アルバレス軍は分断され、彼は部下の多くと共に戦死した。ムンギアはこの知らせを隠そうとしたが、ニュースはトレオンに達し、連邦軍の士気は消沈した。ムンギアは彼の持つ火力に期待をかけ、トレオンに近づく敵に上から大砲を浴びせようと、トレオンを取り巻く幾つかの丘の上に砲を据えた。しかし、野戦を得意とするピヤは砲台を丘から丘へ次々と襲撃し、連邦軍の大砲を分捕った。この時点でムンギアはトレオン防衛を諦め、退却をはじめた。連邦軍はパニック状態になり逃げた。逃げながら、ムンギアはジェネラル・ルイス・G・アナヤに丘を奪回するよう命じた。初めのうちアナヤの反撃は効果をあらわした。彼は状況をムンギアに報告し、援軍を求めようとしてサン・カルロス・ホテルに戻った。しかしムンギアは既に逃げていた。北から進軍してきた連邦軍ジェネラル・カストロは最初に放った大砲が味方の歩兵を直撃し、叛乱を起す寸前の事態になった。そして、少数の革命軍で守られているカマルゴを攻め落とせなかった。³²

10月1日の夜、革命軍はトレオンに入った。住民は盗みや掠奪を覚悟していた。トレオン駐在アメリカ領事、ジョージ・カロサーズによると、一部の地区では多くの店で掠奪が行われ、完全に破壊された。しかしピヤの命令によって掠奪は数時間で鎮圧され、夜十時には完全に秩序は回復していた。ピヤは連邦軍の将校を処刑し、兵士はピヤ軍に加わることで助命し、ある者は逃がした。ウエルタの連邦軍はマデロ、ピノ・スワレス、ゴンザレスを処刑したように、捕虜は全て処刑した。³³

ピヤはトレオンでの勝利で大量の武器を獲得し、強力な砲兵部隊を持った。十一の砲の中にはピヤ軍の主砲となるエル・ニーニョと呼ぶ巨砲も含まれていた。ピヤはトレオンの

資産家や銀行から三百万ペソの強制貸与を引き出した。トレオンの勝利によりピヤの国内外への威信は急上昇し、メキシコ革命の一大転機になった。ゲリラ戦から正規軍の戦闘へと転換し、革命軍は広い地域にわたり大きな力を及ぼすようになった。³⁴

一方、カランサは出身地コアウイラ州のコントロールをすっかり失い、後を託したジェネラル・パブロ・ゴンザレスの軍は沈黙していた。夏、革命軍最高司令官に任命されたカランサも、マデロと同じように革命軍を全て統一することは無理だろうと連邦軍側は見ていた。ましてや、盗賊上がりの無学で、政治的経験のないピヤは、一度敗れると、軍を掌握できず、せいぜい地方ゲリラの大將になるであろうと予想していた。次のピヤの軍事行動はウエルタ政権の楽観論を裏づけることになった。多くの観測筋もピヤの軍事能力を疑問視していた。彼はチワワ市を攻め、多くの将校が反対するのを退け、トレオンでやったような正面攻撃を仕掛けた。チワワ防衛軍指揮官メルカドは敵前逃亡をしたムンギアと違っていたし、守備隊も連戦練磨のオロスコ軍兵士が主力で、南から連れてきた徴兵ではなかった。連邦軍は頑強な要塞を築き、重砲についても歴然とした差があり、ピヤよりは遥かに豊富な弾薬を持っていた。それでもピヤは三日間チワワ市へ攻撃を重ねたが、機関銃と砲弾により終に崩れて退却した。守備隊はピヤの腰を砕いたことをはっきりと確認した。

35

チワワ市での挫折はピヤと革命運動に大きな打撃を与えた。ピヤの権威は傷つき、チワワ、ラグーナ、ドゥランゴの革命グループの結束は壊れる寸前であった。ピヤ軍はチワワを迂回して南進することは出来ず、北方のフアレス市の攻撃には危険が伴った。連邦軍指揮官や観測筋は、ピヤは行き場を失ったと思った。国境の町を攻撃すると、アメリカ側で犠牲者が出る可能性が十分にあることは、マデロの時の経験で分かっていた。ピヤは今回のエルパソ攻撃は更に難しいことを知っていた。前回はチワワ市の守備隊のことは全く気にしなくて済んだが、今度は強力な連邦軍が北へ援軍を送り、挟撃されることは明らかであった。それにも拘らず、ピヤは国境の町を攻撃する以外に道を開くことは出来ないと考えた。³⁶

幸運と天才的なひらめきがピヤに勝利と世界的な名声をもたらした。彼はフアレスとチワワの間を運行している石炭や資材を輸送する列車をハイジャックし、車掌に、ピヤ軍が前方に居るのでどうしようか、とフアレスにある司令室へ電報を打たせた。司令室は予想通り列車に引き返すことを命じ、所在地と列車の安否を各駅から具に報告するよう命じた。ピヤは二千の兵を列車に乗せ、各駅の電信技士はピヤ兵から頭に銃を突きつけられ、ピヤの通信士が電文をチェックし、フアレスの司令室へ、そちらへ向かっている、と発信させた。こうしてピヤと二千の兵は易々とフアレス市の中へ入った。列車は午前二時、駅に滑り込み、兵士がドット飛び出した。革命軍兵士が市の中心部で配置に付くまで、一発の弾も発射されなかった。守備隊の将校や兵士は既に眠っていた。しかも多くの者は無数にあるバー、売春宿、博打場において、抵抗する術もなかった。朝四時、戦闘は終わった。競馬

場近くの家に立て籠もって最後まで戦った志願兵も五時には弾が切れ、抵抗は終わった。アメリカの新聞はビヤを偉大なジェネラル、メキシコの偉大な革命家と書きたてた。彼等は規律正しいビヤ軍を絶賛したが、ビヤが公然と行った捕虜の処刑には嫌悪と憤りを表明した。1912年、ウエルタに介入してビヤの命を救ったジェネラル・フランシスコ・カストロは処刑を免れ、ビヤの厳命を受けた部下が彼を無傷でアメリカへ逃した。37

数週間以内にトレオンを奪回しようと、ジェネラル・レフヒオ・ベラスコの強力な連邦軍が向かっていた。チワワ市駐屯部隊は先の勝利で意気高揚し、今度は攻撃に転じてフアレスを取り返すべく大軍を仕立てて北へ向けて出発した。フアレスで迎え撃つか、あるいは別の場所で戦うべきか、ビヤは迷った。フアレスの堅固な連邦軍の要塞はビヤの手に入り、恰好な防衛体制を整えることが出来た。しかし、対岸のエルパソで被害者が出るとアメリカ軍の介入を受ける危険性は十分にあった。連邦軍が故意に、米軍を挑発するために川向うを狙って撃つことも考えられた。決定的な要因となったのは、ビヤ軍は長期にわたる包囲攻撃に耐えるだけの弾薬を持っていなかったことであった。米国介入を回避し、即座に勝利を収めるために、三十マイル程離れた小さな鉄道の駅があるティエラ・ブランカを決戦場に定めた。38

11月23日、半分以上も空になった弾帯を肩にかけた五千五百の反乱軍は夜明け前フアレスを出発した。農民やインディアンの一部は銃を持たなかったが、マチェッテや狩猟ナイフを誇らしげに持っていた。後尾に女たち、ソルダダエラが従っていた。ある女は弾帯をかけ、カービン銃を持って男たちに混じっていた。彼等は皆連邦軍の優れた重砲の威力と、恐ろしいインパクトを知っていた。今回は双方数の上では同等であったし、連邦軍はオロスコ配下の、同じチワワ、ドゥランゴ、コアウイラの出身者であった。何が彼らをウエルタ側に追いやったのか。彼等は何を得ようとしたのか。しかし今となっては、負けて失うものの方が大きかった。彼等の戦闘意欲は、革命軍と同じであった。ビヤにとって難儀であったのは、革命軍は未だ完全に一体化していなく、行軍はまるでジプシーの集団のようであった。少なくとも軍隊のように見えたのはビヤ直属の精鋭のみであった。ビヤ軍には多くの少年がいた。中には十から十一歳ぐらいのものもいた。39

ティエラ・ブランカでは通常の戦闘では考えられない総指揮官や兵士が連邦軍を待ち受けていた。革命軍は砂丘を見下ろす小高い丘の上に陣取っていた。連邦軍が攻撃を加えるためには、大砲が動けなくなる可能性のある、この砂丘を超えなくてはならなかった。戦闘は23日の夜、連邦軍が列車で兵を送り込み、革命軍の前線を攻撃して始まった。双方が突撃を繰り返し、相手を出し抜こうとして二日が過ぎた。大砲による火力、機関銃の数、弾薬の量で優る連邦軍は、絶え間なく革命軍の前線を叩き、次第に死傷者を増やしながらもビヤ軍は踏みとどまった。しかし三日目になるとビヤ軍の戦況は絶望的になった。弾薬が底を付き始め、連邦軍の砲撃は一向に止む気配はなかった。このとき、ビヤは大胆で死

に物狂いの行動に出た。敵の射撃が弱まったとみるや、ビヤは総攻撃を命じた。そして、決定的な瞬間を逃さず騎兵が側面攻撃を掛けた。ビヤが機関車にダイナマイトを積んで連邦軍の列車に突入させると、大音響に敵の兵士はパニック状態に陥った。政府軍の敗走が始まった。ビヤの腹心で、殺し屋と呼ばれたロドルフォ・フィエロは、連邦軍を乗せた列車が徐々にスピード上げるのを馬で追いかけ、機関車に飛び乗ると機関士を撃ち殺し、列車を急停車させた。停止した列車にビヤ軍が襲い掛かった。彼らはチワワに向かって逃げ、大砲は全てビヤの手に落ちた。40

ビヤは良く考え抜いて戦場を選び、陣を敷いた。敵の激しい砲火を前に、よく兵士の士気を保った。彼の騎兵攻撃は緻密に計算され、敵を攪乱した。しかし多くの欠点があった。彼は予備軍の概念がなく、全部隊を戦闘に投入し、援軍が必要などときには戦闘中の部隊を引き抜いてそれにあてた。そのため味方に弱い部分が出来、敵に強い部分が出来た。ビヤは未だ効果的な砲の使い方を知らなかった。ビヤは戦闘を総括的にコントロールせずに、ゲリラ戦のように各隊長の判断に委ねていた。これ等の欠点は後の戦闘では改善されたが、予備軍についてはそのまま続けられ、1915年、壊滅的敗北を喫する原因となった。

チワワ市駐屯軍司令長官メルカドは、意気消沈した部下と、多くの砲を失って、チワワに残るか、アメリカに向かって逃れるかの選択を迫られた。チワワの上流社会は連邦軍の支援に最大限の努力をし、チワワに入って何をするかわからないビヤを恐れ、兵士に支払う金をメルカドに与え、止まるよう懇願した。

強力な連邦軍がトレオンに向かっていて、トレオンを奪回したら、メルカドは再びメキシコ市との補給路を回復する見込みはあった。それにも拘らず、メルカドは撤退を決意した。オロスコ配下の兵士はティエラ・ブランカの敗北で混乱し、盗賊となり、チワワの支配層や上流階級を襲い始めたため、軍の掌握が出来なくなったのが、メルカドが撤退を決意した主な理由であった。ビヤの到着までの治安維持に二百の部隊を残し、ルイス・テラスやエンリケ・クレエルなど、チワワを支配してきた者たちを伴ったメルカドの部隊は、年の末チワワを捨て、まだ連邦軍が守っている国境の町オヒナガへ向かった。41

31. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P215

32. Ibid. P216

33. Ibid. P217

34. Ibid. P222

35. Ibid. P223

36. Ibid. P224

37. Ibid. P224

38. Ibid. P225

39. Ibid. P226

40. Ibid. P227

41. **Ibid. P228**